
魚人転生者と召喚被害者

浩太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魚人転生者と召喚被害者

【Nコード】

N5258X

【作者名】

浩太郎

【あらすじ】

もっとマトモにゲームやっとならば…と後悔したけどもう遅い。とあるゲームな世界の魚人に転生した女性が、召喚されたはずの甥っ子を探してまわるお話、です。

超スローペースの気まぐれ更新となります。R15も残酷描写…も保険です。

001 色々思い出しました

「！」

アレイスタは跳ね起きた。いつもの室内が視界に映る。薄暗いから、まだ夜明け前なのだろう。どくどくと激しく脈打つ胸、頬にかかる赤毛。段々と冷えてくる汗が冷たい。

「…もつと…」

震える両手を動かし、ゆっくりと顔を覆う。

「…もつとレベル上げておけばよかった…！！」

吐息混じりに吐き出したあと、そういう問題じゃないと気付いた。

アレイスタ・ゴメスは魚人族の雌性体、孵化してから6年になる。群れには属していない。海流に乗った卵が、海洋学者ロザリア・ゴメス博士の水質調査用の仕掛けに引っ掛かったのだ。以後、育ての親である博士とこの離島で2人暮らしをしていた。1週間前まで。

やましたとおこし
山下透子は人間の女性体、享年32才。結婚はしていないが時流など関係ない安定した企業に属していた。甥っ子と2人暮らしをしていた、のだが…。さて、どれだけ前のことか。

アレイスタは今朝方、自分にもう一人分の記憶があることを知っ

た。

記憶の中で、自分は山下透子だった。性格があまり変わってないためか、記憶が増えても違和感はない。2人分の記憶はY字の様に混ざりあって、現在の彼女に続いていた。

だから、それはいい。いやよくないか？思い出した記憶に2つ問題があった。それ以外は普通の女性の記憶だ。まあよい。

問題の1つ目は、この世界が、透子のやっていたゲームそのままだということ。

問題の2つ目は、透子と甥っ子が、召喚被害者だったのではないかということである。

002 問題の1つ目は、頑張ってもムダだったってこと

さて、問題の1つ目について言及したい。

問題の1つ目は、この世界が、透子のやっていたゲームそのままだということ。

それが何故問題になるかと言えば、透子の設定したキャラクターと、ゲームに対する態度にある。

…もつとまともに設定しておけばよかった…！

アレイスタは魔法が苦手である。呪文は囁むし、魔法陣は間違う。どれだけ練習しても上達しない。魔力測定機では程々に高い値が出たものの、博士からは「なんていうか…人には向き不向きがあるから、落ち込むんじゃないよ」と生暖かい視線を向けられた。

ならばと努力した武器の扱いはどうかと言えば、こちらもさほど上手くない。アレイスタは体格にあまり恵まれていないため、当たっても威力が見込めない。では手数を増やせるかというと、普通に60代の博士に負ける。

博士は「私もさほど得意じゃないけど、人よりちよつとはマシよ」と苦笑を漏らしていた。

つまり、彼女はどれだけ頑張っても、魔法も武器も普通に届くか届かないかといったところ。座学、特に理数科目は博士も訝しむ優秀さであったのに、この事実彼女のプライドを傷つけた。自分の不甲斐なさに枕を濡らした夜も、1度や2度でない。

そして、現在の彼女は、設定したアバターの容姿を持っている。赤銅色の髪に碧眼というクリスマスカラーな配色。見かけ上ハイティーンな身体。おそらく能力もゲームに準じたものだろう。投げ出した当時の。

上達しない道理である。

透子は、アレイスタを、魔法にも武器にも特化させなかった。

透子がアレイスタに設定した特徴は、魔法でも武器でもない。

「魅力」である。

そもそも、透子にはゲームをやる習慣がない。

今回は、甥っ子にねだられたから付き合っただけというのが正しい。クリスマスに携帯型ハードにソフトと周辺機器を2人分買った時は総額に少し気が遠くなったが、まあ親類縁者がいなくてお年玉を見込めないのだからたまには、と奮発した。透子は甥っ子に甘い。

甥っ子が欲しがったゲームは、透子は知らないがいわゆるMMORPG（多人数参加型オンラインRPG）の一種だった。剣と魔法の世界。そこでモンスターを退治したり仲間にしたり戦争をしたり、さらには猟師になったり教師になったりと、喧嘩したり生活したりするのだ。政治家や官僚、外交官といった国に雇われるような難しい職はないが、かなり自由に活動できる。また、キャラクターのバッテリーや能力値、操作性の設定などについて、かなり自由度が高かった。自由度が高い分難易度も高い。それがこのゲームの魅力であ

る…。

と、透子は甥っ子に聞いた。細かいことはわからない。世界中で何億人が遊んでようと、透子は受けとった甥っ子が喜べばそれでいいのだ。

初心者をあまり意識しない作りなのだろう。キャラクターのステータスやアバターも甥っ子に大分助けられながら設定したのだ。しかも、甥っ子の助言を聞き流しつつ。

― 魚人にするの？

― うん、魅力を高めればボコさず仲間に来るみたいだから。魚人が1番魅力高いからさ、むんむんなねーちゃんにするの。

― 攻撃手段もあった方がいいんじゃない？
魔法が使える様に、もうちょっとこっちに割り振らないと。

― んー、魔法じゃなくて、これがいいな。
二刀流。

― …とー、魚人は前衛には向かないよ。

― いいの。
ちまちまやるのは趣味じゃないから、とにかく剣でぶっこむから！

― …僕、剣士にしちゃったけど。
一緒にやるならバランス悪くない？

—2人で突っ込めばいいじゃん。

—：早く転職するから。

それまで待ってて。

—？うん。

あ、ひーちゃん、もっと、こう、エロい感じで！

—とーはこんなもんだよ。

—なんだとう！？

：ああ、ひーちゃん、なんでもっと止めてくれなかったの…！

もっと適正に合わせて設定すればよかったと後悔しても後の祭り。
種族特性無視なアレイスタが出来上がった。

どれだけ頑張っても上達しない訳である。

そんな感じで始めたゲームだったが、透子はまだゲームにのめり込まなかった。

なにしろ、自由度が高い分、難易度も高い。チュートリアルさえ
てこずった彼女は、途中から完全に放置していた。ゲームのタイト
ルさえあやふやである。

たしか、レベルを上げると転職が可能で、カンストすると転生し
てレベル上限が増える、んだっけ。いくつだったかな？と、臆げに
しか覚えていない。なにしろ、透子には遠い世界だった。

それでも、甥っ子の手前、じわじわとオフラインでクエストをこなそうと頑張り、レベルが上がるたび与えられるボーナスポイントを「魅力」絡みのスキルに割り振り。

ようやく、スキル「美しければそれでいい」から、スキル「美しさは罪」に成長させたところだった、のだが。

…こんなことになるかわかっていれば、もっと役立つスキルにしておいたのに。

後悔先に立たず。

アレイスタは、その言葉をしみじみと噛み締めた。

003 問題の2つ目は、どこに行ったかわかんないこと

次に、問題の2つ目について。

問題の2つ目は、ひょっとして透子と甥っ子が、召喚被害者だったのではないかと思いつたことである。

なぜそう思ったかといえば、透子であるところの自分の最期…なんというか、そう考えると微妙な気分を味わうのだが…が、昔観た映画を思い起こさせるからだ。

オズの魔法使い。

忘れもしないと言いたいが、きれいさっぱり忘れていた、あの日。5月のゴールデンウィーク明け。参観会の日であった。

甥っ子は隠そうとしていたが、透子はすでに仕事を調整し、年休を取得していた。ママ友メーリングリスト侮るなかれ。両親がいない今、彼の参観会に参加するのは、透子の義務であり権利なのだ。外で保護者と居たがらなくなった甥っ子を宥めすかし、父兄会の後、一緒に帰る約束をした。

帰り道。

靴を履き急いで出て行くと、甥っ子は友達グループと校庭で遊んでいた。透子に気付いたのか、別れを告げてこちらに寄ってくる。が、透子の顔を見て、少し顔をしかめた。手を繋ごうとしたらしれっと無視された。ああ、子供の成長とは切ないものだ。

しばらく無言で歩いていたのだが、甥っ子は我慢出来なくなった

のか、斜め後ろに行く透子に話しかけた。

—…何にやにやしてるの。

—にやにやなんて。

ね、外では、オレって言ってるの？

—…

—もー、悪ぶっちゃって、カ・ワ・イ・イ！

—うっざ…

吐き捨てた後に速度を上げた甥っ子に、おいて行かれまいと慌てて追い継る。

—おおう、ひーちゃん。

ちよつと待ってよ。

大丈夫、理解してるよ。

ワルぶりたいお年頃だよね！

親指を立てた透子に、甥っ子の冷たい視線が刺さる。

—マジウザい。

それに外では呼ぶなっつったじゃん。

—ひーちゃ……！？

—だからその…？

！！

透子は、話してる途中で気が付いた。そして固まった。人間、信じがたいものを見ると、頭が真っ白になる。

蛇行するトラック。所々で人や自転車を引っ掛けて、こちらに向かってくる。

視界の隅で、振り返った甥っ子が、透子の顔を見て同じ方向を向き、やはり動きを止めた。

その甥っ子を見て、透子は縛りが解けた。慌てて、彼との距離を詰める。

その時には、もうトラックは目の前だった。

とっさに目の前の甥っ子を突き飛ばそうとした、ら、なんと、彼は驚きの反射神経で透子の延ばした腕を掴んだ。そのまま投げ出され、透子は甥っ子の横を摺り抜けた。

一瞬なにが起きたか分からなかった透子は、心の中で悲鳴を上げる。

…なんで大人しくしてないの、ひーちゃん!!

交差する瞬間の甥っ子の顔は見えなかった。

後ろに迫る大きなトラックの陰は、よく見えたのだけれども。

—ひーちゃん!!—

透子は甥っ子の名前を叫んだ。転倒時に地面についた手のひらと腕、顔、足に、コンクリートで擦った痛みが走ったが、意識の外だった。

転倒した体を急ぎ起こした透子は、目を見張った。

鈍い音を立て、トラックがふつとんだ。

スローモーションの様に落ちていくトラックを、呆気にとられて見送る。地面に叩きつけられ、轟音をあげた。火を吹いた。

驚いて反射的に目をつぶって首を竦めた。熱風が横切っていく。ゆっくりと目を開ければ、そこに先程までの驚異が見える。

何が起こったかイマイチ理解できなかったが、頭を振って切り替える。危機が去って、甥っ子に怪我がなければそれでいい。

と、首を巡らせようとした刹那、息を呑む音が聞こえた。

—…ッ!!

よく見れば、甥っ子を中心に、つむじ風が起きている。風が巻き込んだのか、甥っ子の左手の甲から鮮血が溢れた。押さえた右手から零れた血が、つむじ風にまかれて螺旋を描くのを見て、透子が悲鳴じみた声をあげた。

—ひーちゃん!!

—…ばかッ、とー、止めろ!!

透子は、甥っ子の制止を無視し、つむじ風に跳びこんだ。体中を引き裂く痛みを無視し、甥っ子を抱え込む。

その直後に、全身に衝撃が来た。

目の前が真っ暗になった。

最期は、多分、どこかの室内だった。

重い瞼を長い時間かけて無理矢理こじ開けたら、白茶けた四角い間口から人影のような揺らぎが見えた。

だから、必死に甥っ子を頼んだ。身体がひたすら重くて鈍くて、声となっていたかは分からないが。

「…ドロシーは、帰ったよね？」

甥っ子は、無事だったろうか。

透子の家族は、怪我などしなかったか。

ここにはいないかもしれないが、じっとしていることもできない。

だって、たった一人の家族だったのだから。

004 お客さんが来ます

アレイスタは黙々と荷作りをしていた。少し苛立ちながら。

思い立った：ではなく、思い出したが吉日。今日はこの島に人が来る予定だったので、帰りの船に同乗させてもらえばいい。元から博士の遺言に従って島を出るつもりだったので、少し速まったといえ、片付けも済んでいてちょうどよい。

苛立っているのは、片付けについてではない。この世界の仕様のためだ。

トランクにパンツをつっこむ。

視界の隅で文字が踊る。

【「古びた革製トランク」に「履き古したパンツ」を収納しました】

トランクに上着をつっこむ。

視界の隅で文字が踊る。

【「古びた革製トランク」に「着古した上着」を収納しました】

トランクに歯磨きをつっこむ。

視界の隅で文字が踊る。

【「古びた革製トランク」に「使い古した歯磨き」を収納しました】

「…ウザ…！」

いままでは、「こういうもの」として気にしたことがなかったが、透子の生活を思い出した後だ。何をしても流れていく文字が、ちらちらと視界を狭める。これが実に鬱陶しい。自分の状態を把握出来るようになれば、これを流れないようにもできる、と博士が言っていたが、早くそうなりたいものだ。

と、視界の隅に黒い影。

「…ッ逃がすか！」

すかさずスリッパを構えたアレイスタは、その影を捕らえた。すぱーん、と景気がいい音が響く。

視界の隅で文字が踊る。

【ゴキブリを仕留めました】

【仕留めたゴキブリの通算が50匹になりました】

【称号「ゴキブリ・ハンター油虫の狩人」を取得しました】

【スキル「スリッパ早打ち」を取得しました】

「…要らねえ…！」

アレイスタの呻き声が室内に響いた。

余談だが、彼女は100匹蠅を退治した人間が取得する称号、「フライ・キラー蠅の殺戮者」も持っている。スキル「蠅叩き早打ち」はレベル2だ。

双剣技の取得スキルには、レベル2に達したものはない。

住居のある離島、大地母神の枝毛――ふざけた名前だとも思うのだが――は、つい先日まで博士とアレイスタしかいなかった。今はアレイスタだけだ。なので、最寄の大きな島にある雑貨屋から、生活用品が届く。

届けてくれるのは、漁師のレネ爺さんだ。この島には彼の船以外は来たことがない。付近の海流が複雑なので、慣れない者では潮の流れが読めないのだ。

アレイスタは今まで島から出たことがないので、会ったことがあるのは4人だけ。一緒に暮らしていた博士、たまにくるレネ爺さん、1度訪れたゴメス家顧問弁護士のサー・ウォルターと雑貨屋のミス・リップ。全員人間だ。

今日は、レネ爺さんが、サー・ウォルターとミス・リップ、それに後3人を案内して来る。アレイスタが生活し始めてから、1番多い人間を見ることになる予定だ。

博士の葬儀と遺言の開示のため。

もう昼だから、そろそろ着替えた方がよさそうだ。昼の準備も必要だろう。

アレイスタは素早く身支度を整えると、昼の軽食を準備するために台所へ降りた。

005 サー・エセルバート・ゴメス

サー・エセルバート・ゴメスは親切な男だ。

：ありがたいはありがたいんだけど…。

自分の対面に座る優雅な男をちらりと伺うと、ばっちり目が合った。どうやら、こちらをずっと見ていたらしい。にこりと笑う男に引き攣りながらも笑みを返し、アレイスタは内心ため息をついた。狭い馬車の中、視線で息が詰まりそうだった。

博士が亡くなった後すぐに、アレイスタはサー・ウォルターに連絡をとった。サー・ウォルターからは、博士の弟であるサー・リチャード・ゴメスと、その次男たるサー・エセルバート・ゴメス、それに司祭と連れ立って島に行く旨書かれた手紙を受けとった。博士の希望通りに亡きがらを葬るためだ。遺言状の立会人であったレネ爺さんとミス・リップには、アレイスタからお願いをした。

手紙を受け取ったアレイスタは、少なからず覚悟をしていた。義叔父と義従兄にとって、自分は招かざる客だろう。今時分継子いじめもあるまいが、博士の厚意がよくない結果を招くかもしれない。

結果として、それは完全な杞憂に終わった。

レネ爺さんの船から降りてきた彼らは、非常に紳士的だった。

義叔父のサー・リチャードは、撫で付けられた色の薄い金髪に青灰色の目、彫りの深い顔に高い鼻といった、姉たる博士と似た風貌

で、男振りもよかった。しかし、痩せ型だった博士に対して、彼は体格に恵まれていた。物腰も雰囲気も柔らかく、博士が峻厳たる冬の海をなら、サー・リチャードは春の温かさがあった。

対して、義従兄のサー・エセルバートは、初めのうち、完全に一線を引いていた。彼も父親と同じく穏やかな雰囲気をもとっていたが、初対面特有の見えない壁の向こうにいた。時折、視線を感じて顔を上げれば、ずっと顔を逸らす彼が見えたので、警戒されていたのかもしれない。

ただ、ミス・リップは船の中で彼を気に入ったらしく、あれこれと話しかけていた。その対応から見て、悪い人物ではなさそうだとアレスタは判断した。特に言葉をかわすことはなかったが、葬儀後に家に招いた時には、視線が合っても顔を逸らされることもなくなったので、短い時間だったが無害と伝わったのだろう。

二人が穏やかな人物だったので、軽食を勧めたテーブルでは、和やかな雰囲気で故人の話題を持てた。サー・リチャードが知る博士は、アレスタやレネ爺さん、ミス・リップが知る彼女とは異なる。博士が幼い頃の話聞き、ここで生活していた時の話をした。彼女について一番網羅的に知っていたのはサー・ウォルターだったが、彼は自分から話すことはなく、嬉しそうに相槌を打っていた。故人を直接知らない司祭とサー・エセルバートは聞き役だったが、気まずさを感じさせるようなことはなかった。

思えば、皆さんが帰られるという頃、そういえば帰りに同乗させてもらえないか、とお願いしたことが発端だった。

「お嬢ちゃん、ここを離れるのかい？」

「危なくないかい？」

顔に、心配、と貼付けて、レネ爺さんとミス・リップが言った。

「はい、博士に同胞を捜す様に言われています。
今から暖かい季節になりますから」

「…貴女が一人で？」

その低い声に驚いて、アレイスタは動きを止めた。見れば、ほかもぴたりと口をつぐみ、驚きに目を軽く見開いている。

その声を発したのは、それまで穏やかな笑顔で話を聞いていたサー・エセルバートだった。笑顔のままだったのに、不思議なことに恫喝されているような気分になる。

「はい。その予定ですが…？」

首を傾げながら、はて一体彼は何が気に入らないんだろうと問えば、声がより低くなった。笑顔のままなので怖い。

「…女性一人で行かれるつもりだと？」

「ええと…」

他人を雇えるほど金もないし、他にいないのだから仕方ない。博士の遺産をいただいたが、それを使う気はなかった。

「でも、これもありますから」

そう示したのは、博士の形見の懐中時計。さきほど、彼女の所有として登録されたものだ。実は身を守るための魔道具だと聞いて断

ったのだが…

——貴女は先ほど、剣も魔法もあまり得意でないとおっしゃって
いたでしょう？

身を守る手段はたくさんあったほうがいい。
邪魔になるものでもないですから、取っておいて下さい。

…と、サー・リチャードに笑顔で押し切られた。

懐中時計を見た後、少し考えたサー・エセルバートは、にっこり
と笑って言った。

「では、身を隠すための魔道具を準備しましょう。
女性一人だと危ないですから」

「え、いえ、その、そういったものを準備するお金は…」

「こちらで準備しますよ、従妹殿」

「そんな高価なものを準備していただくわけには」

「貴女は先ほど、剣も魔法もあまり得意でないとおっしゃっていた
でしょう？

身を守る手段はたくさんあったほうがいい。

邪魔になるものでもないですから、取っておいて下さい」

…あれ、どっかで聞いた台詞だなとアレイスタは思った。

「まあまあ嬢ちゃん、せっかくだからもらっておきなよ」

「なあ、せっかくだんながこう言ってくださってるんだ」

「女性ひとりは危ないですからね」

「こういった準備はしすぎることはないですよ」

「息子の言うとおりですね」

周りを味方につけられて笑顔で押し切られ、結局断れなかったと

ころも一緒だった。さすが親子だ、よく似ている。

エセルバート卿は、何でこんなに親切なんだ。

その後、レネ爺さんの船の人数制限に引っかかると聞いたアレイスタが、荷物だけ載せてもらえれば泳いで行くと言ったら、また怒られた。

「ええと、では歩いていきます」

魚たちはアレイスタに親切だ。それこそ、皿を持って立てば、集まって先を争い勝手に皿に飛び乗ってくるほど。言葉がわかるので、食べる気は起きなし、正直、その気遣いが重いので勘弁してほしいと思ってるが、頼めば上を歩くくらい余裕だろう。バランス感覚は必要とされそうだけれども。

と、伝えたのだが。

「…私と一緒に待っていきましょうか」

「いえ、そんな手間ですし。」

私は魚人族なので…」

別に濡れるとか気にしない、と言いたかったのだが。

「私と一緒に待っていきましょう」

あれ、上から被された。

「俺はそれでいいぜ、嬢ちゃん。

大した手間でもないしなあ」

「せっかくだから甘えたらどうだい？

一人で待ってるのもアレだしねえ」

さっきもこの展開だった気がする、と思ったが、結局アレイスタは彼と二人でレネ爺さんを待つことになった。

別れ際、なんだか妙に可笑しそうな顔をしたサー・リチャードと目が合ったと思ったら、彼は片目をつぶって見せた。

「まあ、そんなに困った顔をしないでください。

私もあの子と同じく、貴女をとてましく感じています。

こちらに来ていただけないのは残念です。

機会があればぜひお立ち寄りください」

歓迎はされそうだが、面倒なことになりそうだな、と思いながら返事をした。

しかも、気づけば王都に向かう馬車の中、向かいあって座っている。

確か、「王都には腕のいい魔道具が集まるんですよ」と聞いたときは断ったのだが。何がどこでこうなったのだろう。…従兄怖い。そして視線が痛い。笑顔なのに痛い。

アレイスタは博士と2人暮らしで、他の人間にほとんど会った事がない。そして透子は日本人だ。人と視線を合わせるのは苦手だっ

た。

彼は、ため息をついたアレイスタを気にせず、そのまま言葉を向けてきた。

「貴女は、叔母のことを博士と呼んでいたんですか？」

その言葉に、アレイスタは呼び方を変えた日のことを思い出していた。アレイスタと博士は義理の親子に当たる。それは、手続きが完了した日のことだった。

―― アレイスタ、私と貴女は親子ですね。

―― はい。

―― では、私のことを博士というのは少し他人行儀過ぎて不適切ですね。

別の呼び方を考えなさい。

―― 別の呼び方というと…。

―― 一般的に、母親のことは母様^{かかさま}などと呼びます。

―― …はい、母様。

―― よろしい、ターシャ。

「…いえ、母様と」
「なるほど。」

そして、貴女はなんと呼ばれていたんですか？」

「ターシャですが…」

何が言いたいのだろう、と首を傾げる。

「従妹殿、私と貴女は従兄妹どうしですね」

「はあ」

「私のことをエセルバート卿というのは少し他人行儀過ぎて不適切ですよ。」

別の呼び方をお願いしたいのですが」

あれ、また何か記憶に残っているのと同じやり取りだなとアレイスタは思った。

「別の呼び方といいますと…」

「私は、親しい人にはエセルの愛称で呼ばれています」

なんというか、この難儀な性格はゴメス家のものなのだろうか。あまり、博士に押しの強さを感じたことはなかったアレイスタは、顔を引きつらせた。

「あの、私は」

まだ親しくはないのですが、と言いたかったのだが。

「エセルの愛称で呼ばれています」

あれ、また被された。

「…はい、エセルさま」

「よろしい、ターシャ」

サー・エセルバート・ゴメスは親切な男だ。
多分。

そして、押しが強い。

その親切さと押しの強さに、アレイスタはドン引きである。

006 奇襲を受けました

「大地母神の枝毛」島から、王都ローへ至るには、大陸の最寄の漁村へ船で1時間、漁村から馬車で州都へ1日半、州都から転送陣で一瞬、といった道行になる。漁村からの馬車は、サー・エセルバートが待たせていたものを利用した。サー・リチャードとサー・ウォルターは二人ともゴメス家領ホルスコから来たため、漁村からそちらに道が分かれている。

サー・エセルバートが事前に転送陣の利用申請をして予約を取っていたので、最短時間で王都に着くことができた。途中の息苦しさを思い出し、アレイスタはほっと息をついた。

アレイスタは博士以外の人間と親しくしたこともなく、透子はモンゴロイド以外になじみがない。だから、外人男と間近に接しているのはしんどかった。なによりでかい。分厚く筋肉がついているというわけではなさそうだったが、骨格が違うのか圧迫感が半端ない。笑顔を向けられているとはいえ、いやだからこそ、余計に怖かった。とにかく着いてよかった。

ちなみに、道中の車中泊はアレイスタだけで、サー・エセルバートは御者とともに野営した。このときほど彼が紳士でよかったと思つたことはない。一時的に圧迫感から開放され、本当によかったしみじみ思った。

それに、なんだかんだ言いくるめられて、結局魔道具の通信石を渡され、2日に1回は彼に現況を報告することになってしまった。また長く付き合うと何かしら押し通されそうで怖い。

転送陣のあった大きな建物は、比較的多くの人がいたようだ。出れば、陣の利用客目当ての辻馬車を多く見た。

初めて見た王都は、州都よりさらに大きかった。漁村と変わらず焼煉瓦で出来ているものがほとんど、大きめな建物は石造り。2階建て以上の建物も多い。

透子が透子のままで初めて見たら、異国情緒漂うその光景に感嘆の声を上げただろう。が、アレイスタが住んでいた家も似たり寄ったりな作りだった。

アレイスタがアレイスタのままで初めて見たら、人の多さに驚いただろう。が、透子が住んでいた東京ほど人が多くも大きくもなかった。多分、総人口も全然違うのだろう。

そして、透子であるアレイスタはそのことに気づいて、なんとなく損をした気分になった。とはいえ、多民族入り乱れる通行人は、一見の価値があったが。

2人分の荷物を持った――断ったがやはり断り切れなかった――サー・エセルバートが捕まえた辻馬車に乗り込んだ。御者への指示を聞けば、王都の内郭に向かうようだった。

アレイスタがいる間は一緒に宿をとると言っていたので――こちらもやはり断ったのだが――そちらで宿を探すのだろう。彼は王都に就職先から斡旋された住居があるとのことだったが、そちらは関係者以外立ち入り禁止らしい。

彼が選んだ宿は、上品だが気さくな雰囲気だった。サー・エセルバートが手続きをしている最中、ホテルというよりは民宿かなあと

宿内を見回していたアレイスタは、そこで奇襲にあった。

その宿屋にはペットが飼われていた。毛足が長い金茶のたれ耳の大型犬と、太り気味の三毛猫。2匹が宿の待合室奥で転がっていたのを見て、アレイスタは呼び寄せるようにちゅちゅと音を立てた。アレイスタは動物が好きだ。

と、耳をぴんと立てた猫が、すさまじい勢いで走ってきた。アレイスタは思わず身を引いた、のだが。

「げふッ」

弾丸のように走ってきた猫は、そのままアレイスタの腹につっこんだ。うめき声を上げたアレイスタの体に爪を立ててよじ登り、肩にちょうどよく体を落ち着けることが出来たらしい。

ざりざりとした舌で頬をひたすら舐められた。もう片方の頬に体を擦り付けられているせいで、振っているらしい尻尾が、しきりと額を打つ。

なんの嫌がらせだと思ったが、喉をごろごろと鳴らしているということは、猫は上機嫌なのだろう。魚の味がするのだろうか。

と、今度は後ろからどしりと足に重量級の衝撃を受ける。たまらず膝を着けば、のしりと背中から圧し掛かれた。はっはっはと生臭い息が、猫と反対の頬にかかり、べろんべろん舐められた。

ひいひいひい。

生臭いひいひいひい！

2匹に嘗め回され、顔を覆っていたベールが帽子ごとずりずりと落ちてくる。左右前後に揺さぶられて、段々と態勢がつぶれてきた。

あ。これはやばいかも、と思ったところで。

「ターシャ!？」

「…！」

お、お客様！申し訳ありません！
大丈夫ですか!？」

助かった。

ほっと息を吐いたところで、視界の隅で文字が踊るのが見えた。
が、それは気づいたときには消えてしまっ、読み取れなかった。

なんとか犬と猫を引き剥がし、借りた部屋に移動した。まったく
はがれようとしない彼らは、頼めば離れてくれた。むしろ、すみま
せんすみませんと謝り続ける宿の人の方が、扱いに困った。おかげ
で宿代が安くなった。

…何が彼らをそこまで駆り立てたのか…。

よだれまみれになったアレイスタは深く部屋のソファに座り込み、
ため息をついた。

「大丈夫ですか？」

「…なんとか」

どうぞ、とサー・エセルバートが、茶を入れてくれた。まめな男

である。アレイスタはありがたくそれを受け取った。

007 街歩きの罠

「今後の予定について、少し見直しませんか」

ソファで一息ついたところで、向かいに腰を下ろしていたサー・エセルバートが声をかけてきた。

当初馬車の中で相談していた予定は、こうだ。

1. 魔道具を購入する。もしくは製作を依頼する。
2. 魔道具が手に入るのを待っている間に、
 2. 1. 情報提供依頼を出す。
 2. 2. 旅の準備をする。
3. 魔道具を受け取ってから旅に出る。

「見直しというと…」

転送陣の利用も、辻馬車の利用でも、特に時間をとられていない。今は昼さがりで外出を見送る時間でもない。

さて、どこを見直す必要があるだろうと首を傾げ、自分の格好に気づいた。

アレイスタは、一昨日から同じものを着ている。首まで覆う黒のドレスに、顔を覆う黒いレースのついた帽子。そう、彼女は喪服のままだった。移動には適さないので着替えようとしたのだが、このままだと押し切られてしまった。サー・エセルバートは着替えたくせに。

それが、犬猫に揉まれて毛まみれ、よだれでぐちゃぐちゃだ。なんか妙なおいもする。宿の従業員が洗濯屋に出してくれると言っ

てくれていたから、着替えてお願いすればいい。

「…すみません、着替えますので、少し待っていていただけますか」
「いえ。そうではなく…」
服を新調しませんか」

「…？
なぜ…？」

洗えばきれいになるはずだ。それに、他にも服は持ってきている。

「気分を悪くしたら申し訳ありませんが、貴女はあまり外に顔を出さない方がいいでしょう。

他に顔を隠せるようなものがあればいいのですが…」

隠せば少しはマシでしょう、そう言ってアレイスタの方を伺う様なまなざしを向けてきたので、彼女は首を横に振った。

そもそも、なんで顔を出したら不味いんだろう？

怪訝な顔をしていたのがわかったのか、彼は少し言いよどんだ。

「貴女は魅力の力が強すぎます。

危ないかもしれないので、あまり顔を出さない方がいいかと」
「…？

よく分からないのですが…」

透子は、もちろんそれを知っている。そういう風に『アレイスタ』を作ったのだ。しかし、それで街中で問題が起きるようなことはなかった。フィールドであっても、ほとんど力にはならなかった。どれだけ、魔法か剣かに偏らせて作ればよかったと後悔したことか。

敵を倒してから仲間にすることができるとわかってからは、特に。

「私は、スキル『力量把握』を持っています。

あなたは、自分のステータスを確認できますか？」

「いえ、まだ…」

そうですか、と頷いたサー・エセルバートは、貴女の魅力の値は、少しありえないくらい高いんですよ、と苦笑した。

「そのままだと問題が起きやすいのではと案じています。

先ほどのように、犬猫だけで済めばいいのですが」

「…」

魅力は、いわゆる『敵』、モンスターにしか影響を及ぼさないはずだ。ましてや街中でなど。ステータスは、戦闘行動の出来るフィールドでしか効果がないものだ。村人に攻撃できないのと同じである。

「服を買うだけなら、大して時間はかかりませんよ。
魔道具ができるまでの間でしょうし」

何かあったら危ないでしょう？

にっこりと笑われて、アレイスタは、頷いた。反対するほどのことでもないというのもあるが、この笑顔を見ると勝てる気がしなくなってきたのだ。

ナンパ2回、養女にならないかとの誘い3回、人買いによる誘拐未遂1回、迷子に懐かれること1回、荷物引きのロバに甘噛みされること1回。

服屋や雑貨屋が軒を連ねる界限に着いたころには、アレイスタもなんとなく事態を理解した。どうやら、魅力ステータスは街中でも影響を及ぼすらしい。というか、町だからとか、そういうのは関係ないのかもしれない。リアルだとしたら当然か、とアレイスタは納得した。普段着に着替えたとはいえ、ちぐはぐながら顔を隠すために喪服の帽子はかぶったままだったのだけでも、30分弱で着くと聞いていた道程に1時間ちよつとかかった。

ちなみに、誘拐犯は、離してくださいとお願いしたら離してくれた。いい人で助かった。

もつとも、途中でサー・エセルバートが走っている馬車に乗り込んできたのが怖かったのかもしれない。正直、アレイスタも怖かった。なまはげかと思った。

古着屋で適当に買った頭巾^{フード}つきショールを巻いて深くかぶり、かつショールの襟元を引き上げて、アレイスタは頭を下げた。

「…ご迷惑をおかけして、すみませんでした」
「いえ、何事もなくてよかったです」

ずっと出された腕につかまった。浚われたあたりで、危ないからと腕を組むことになったのだ。断ったが無言の圧力に屈したアレイスタは、体格の違いから抱っこちゃん人形を思い出して情けない気分を味わった。

「魔道具を商っているような商店は、またちよつと離れた場所にありますから」

そう説明しながら通りで辻馬車を捕まえたサー・エセルバートに続いて、アレイスタも馬車に乗り込んだ。

閑話001 サー・エセルバートの場合（前書き）

主人公格周りの人々の視点でお送りします。

閑話001 サー・エセルバートの場合

その一。

サー・エセルバート・ゴメスことエセルバート・ゴメス・北征勲爵ナイト・コンクエスト・ザ・・ノリス士あるいはグラント・キャプテン（勇敢なる大尉）・エセルバート・ゴメス。親からいただいた爵位と名前を格式ばって言うならば、エセルバート・ルイス・アカーテース・セツ・ゴメス・ローウェルⅡトウーロ（トウーロ子爵エセルバート・ゴメス・ローウェル）という、長い名前を持つ男の心情に関する話。

美しいが、絶世の美女というわけではない。成熟した女性が好まれるエルゲントス王国では、基準から外れるだろう。

顔立ちは整っていたが、その表情には憂いや妖艶さといったものとは無縁で、愚直な幼さが残っていた。どちらかというと凛々しい印象を与える。緑色の目だけは文句なしに美しかったが。

赤銅色の髪は短めで、礼儀にしたがって（※1）伸ばされたのは襟足のみ。それもおおざっぱにまとめてあった。

すんなりとした手足に、ささやかなながら丸みを帯びはじめた未発達な身体。あるいは、魚人族の女性はそういった体型のものなのかもしれない。

エセルバート・ゴメスには、特にこれといった性癖はない。ごく一般的な基準で美しい女を好んだ。

つまり、アレイスタは彼の好みから外れていたのだ。彼に少女趣味はない。

…少なくとも、外れていたはずだった。

初めて会った義理の従妹とは、なかなか気持ちがい距離を保っていた。

幼さが残っているせいか、年頃の女性特有の押し付けがましきも自意識過剰さもまだなく、かといって頭の回転は悪くない。弱腰なところはきになるし、緊張感をもって恋愛を楽しむ相手としては足りなかったが、気楽な会話を楽しむ相手としてはちょうどよかった。

しかし、それは馬車に乗っている間の話だ。

街を歩いていてふと横を見れば、彼女がしばしば姿を消していた。急ぎ振り返れば、そのたびに何かしら巻き込まれている彼女にいい加減呆れた。そのたびに彼女はぺこぺこ謝ってきたが、世間知らずにもほどがある。

彼女が男に声をかけられたのを見て、不愉快に感じた自分がいた。大体、少女のような姿形のものに何を考えているのだろうか。肩を抱いて彼女を引き寄せたら男は慌てて去っていったが、肩の小ささに驚くと同時に、危機感のなさには少し腹が立った。

伯母の家では少女がひとりで、と魔道具を持たせることを主張したが、そうしておいてよかったと思った。

だが、さすがに馬車に押し込まれているのを見つけたときは、洒落にならないと血の気がひいた。

とっさに体が動いた。能力を隠すこともせず走って馬車の後ろに飛び乗り、強引に扉をこじ開けて入り込んだ。飛んでいった扉に驚いた民衆がいたようだが、知ったことではない。

車内には3人が乗り込んでいた。強引にアレISTAを持ち上げて押し込んでいたところを見ると、少なくとも1人は力自慢の獣人だろう。

急に馬車に入り込んだエセルバートにひどく驚いたようだったが、反応は早かった。全員一斉に懷から銃を抜いた。

が、エセルバートの方が早かった。

2人は抜いた銃ごと腕を壁に縫いとめ、1拍遅れてもう1人を足で対面の扉に縫いとめた。スラックスの下には、鉄骨の入っている軍用ブーツを履いていたせいで、ぎしりと扉がきしむ。

「つかはッ…」

最後1人は、足を使って首ごと縫いとめたせいで、呼吸が厳しいようだった。が、この程度で死ぬこともないだろう。

喉がつぶれたとしても、エセルバートが気にするようなことでもない。

少し動いたせいで、上げていた髪が乱れて一筋落ちてきた。首を振って目から払い、顔を上げればアレキスタと目があった。怯えさせないようににこりと笑ったら、はじかれたようにびくりと肩を揺らした。

ああ、怯えさせたか…（※2）

内心ため息をついたが、外に出すようなマネはしない。笑顔のまま問いかけた。

「大丈夫ですか？」

「あ…、は、い…？」

ありがとうございます…」

顔が青ざめている。が、彼女はベールの奥の目をそらしたりはしなかった。

と、ずるずると背もたれから落ちた彼女が笑い始めたので、籐がはずれたのかとぎょっとした。すべり落ちたため、帽子が彼女からズレて、顔がさらされる。

「え、ちょ、大丈夫ですか…!？」

「…は、はは、はははははは…助かったあ…」

ひとしきり笑った後、彼女はへによりと笑った。どうしたらいいのかと内心うろたえていたサー・エセルバートは、その半泣きの情けない笑顔に固まった。

「あの、本当にありがとうございます」

再度礼を言って彼女がにっこりと笑った。エセル様はいつでも笑顔なんですね、そう言って苦笑した彼女に、

瞬間、一瞬頭が真っ白になった気がした。

そして、これはまずいと思った。

まずい、とてもまずい。

落ちかける感覚にぞくりとしたが、それを表に出すほど子供でもない。笑顔を保ったまま、それはよかったと返事をする。

さて、彼女が落ち着いたのであれば、拘束している彼らをまとめて片付けて、御者の男も何とかしなければならぬ。視線を移せば、男たちは彼女の笑顔に晒されて、恍惚とした表情を浮かべている。なんととはなし面白くなって、わずかに力を強めた。

めきりと骨がきしむ感触が伝わってくる。

痛みで我に返ったらしい男たちが、恐怖で引きつった顔を向けてきた。

「…！」

黒の…！？」

気づいたららしい男が何か言いかけたが、そちらに視線を向けただけで黙り込んだ。顔色が青い。カタカタと振るえはじめたのが伝わってきた。すでに緊張が取れたらしいアレイスタが、よくわかっていない顔をして首をかしげている。

「…？」

ええと、私、帰りたいのですが、いいでしょうか？」

彼女の提案は震える男たちには、天の助けだったろう。大きく頷く男たちに、どうも、と返し、行きませんかと笑顔に向けてくる彼女の気楽さのため息がこぼれそうになる。と、同時に、馬鹿らしくなった。

「行きましようか」

そう返したサー・エセルバートの笑顔に、アレイスタがおやという顔をした。

彼は気づかなかったが、多分それは、アレイスタに向けた中で、はじめての自然な笑顔だった。

(※1) 女性は髪を長く伸ばし、ゆったりと結うのが主流。髪が短く、かつそれを晒している女性は、犯罪者として刑罰を受けたものと見られた。

(※2) 動き云々より、こんな場面でも笑顔のエセルバートが怖かった。

彼にもし心の声が聞こえていたら、

…ここでも笑顔かよ、超怖エ！

悪い子じゃないので許してください！

というアレイスタの心の悲鳴が聞こえていたはず。

008 魔道具店の3職人

サー・エセルバートに案内された店は、一見の価値のあるものだった。磨かれた飴色の木材は細かな細工を施され、元の枝を生かして波のように広がる形は優美な曲線を描いていた。間の硝子で屋内が透けて見える。

それは美術品に似て、アレイスタにアンティークの戸棚を思い起こさせた。石と煉瓦が主な町並みに合って、その木造建築は不思議な調和を見せている。

街路からわずかに間が空いて立てられており、1階に上がるための階段と、地下に降りるための階段が、それぞれ伸びていた。こちらの手すりも描く曲線が美しい。

見上げていたアレイスタを促して、サー・エセルバートは街路から伸びる階段を上がった。察するに、1階が店舗、地下は工房なのだろう。

コロン、と来客を知らせるベルが鳴った。ドアとのつなが目から知らないこれも、優しい音色から判断して木製なのだろうか、とアレイスタは感心した。見事なものだ。

頭を垂れて出迎えてくれた栗色の髪の女性につられて、アレイスタは軽く会釈した。サー・エセルバートのように鷹揚に挨拶を返すような文化は、彼女も透子も持ち合わせていなかった。

「いらっしやいませ。

お待ちしておりました、エセルバート卿。

はじめまして、新しいお客様」

にこりと笑顔を返してくれた女性からは、げっ歯類のような歯がわずかに覗いて見えた。愛嬌があって可愛い。

たいていの獣人は、人態をとつてもどこかに獣相が残るものだ。匂いからしてヒトではなさそうなので――魚人は、目は悪いが鼻はい――彼女は栗鼠人かもしれない。

ヒト科ヒト族ヒト亜族獣人属栗鼠。もっとも、獣人の血を濃く引いた、前歯が突出しているだけの女性かもしれないが。

ちなみにアレイスタはヒト科ヒト族ヒト亜族獣人属魚となる。通称魚人。残っている獣相は、手足の指の間に残る1センチばかりの水かき。おかげで手袋は直しが必要になる。

「本日は新しい依頼者をご紹介いただき、その方が新しい魔道具を作成されるということでしたでしょうか。」

魔道具については、工房で職人たちと相談され、どういったものにするか決定されるのがよいかと思うのですが、いかがでしょう」

「はい、よろしく願います」

サー・エセルバートが支払うと言っていたので、彼が依頼者かと思っていたのだが、どうやら違う紹介がされていたらしい。

紹介者であるサー・エセルバートの顔をうかがうと問題ないとかかりにうなずいていたので、おとなしく返事をした。もし支払えと言われたら足りるかなと不安になる。

どうぞこちらへ、と女性に案内され階段を降りていく。からり、とドアを開けた先は、アレイスタが工房だろうと当たりをつけたとおり、数人の職人が作業をしていた。

顔を上げ、客を認めると席を立てくる。老いも若いも入り混じり、

といった雰囲気だが、席を立ったのは3人ばかりだった。

1人はサー・エセルバートと並ぶほど背が高いが、残りの2人はアレイスタの肩よりも低い。1人は胸よりさらに小さい。そのかわり、もう片方はえらくがっしりとした骨格で、幅はアレイスタよりもありそうだった。

背高さん、小柄さん、幅広さん、とアレイスタは仮に呼ぶことにした。

口火を切ったのは、幅広さんだった。えらく人懐こい雰囲気の人だ。アレイスタは彼の蓄えられた立派なひげを見て、サンタクロースを思い出した。見事な白髪に青い目がきらきら輝く。

「お久しぶりですなあ、エセルバート卿。

今日の依頼者はそちらのお嬢さんですか」

「ご無沙汰しています。

いつもすばらしい出来に感謝しています。

こちらが私の従妹のアレイスタ嬢。

今回は彼女のために魔道具を作成していただきたい」

「はじめまして、アレイスタ・ゴメスです」

フードを取って顔を見せながら挨拶をすれば、目を丸くしたサンタクロース氏が相好を崩した。後ろでは、背高さんがヒュウ、と軽く口笛のような音を出し、小柄さんも目をまん丸にして顔を見ている。魚人が珍しいのかもしれない。

差し出された手を握り返せば、もう片方の手も添えて包むように両手で握ってくれる。職人特有の硬い大きな手だった。

「こりゃあまた、綺麗なお嬢さんだ。

ワシはイムホテップ。

ホップと呼んでくだされ」

「よろしく願います、ホップさん」

挨拶は交わしたものの、ほっほっほ、といかにも好々爺といった様子のイムホテップ氏は、中々手を離そうとしない。

さてどうしよう、とにことした相手の顔を眺めながら困惑していたところ、後ろで、背高さんが彼をつついた。

「ホップ、そろそろ変われ。

彼女も困っている」

「なんじゃ、気が短い。

寿命が長いんだからもうちっと待てい」

「お前だって変わんないだろう、それ」

言いつつ、イムホテップはアレイスタの手を離そうとしないまま、脇をつついてくる背高さんとじゃれあいをはじめてしまった。

サー・エセルバートや案内役の女性を見れば、ちょっと肩をすくめるような動作が見れた。

どうやら、いつものことらしい。困った。

「おい、こんなところで喧嘩すんな。

客の前だぞ」

結局、仲裁してくれたのは小柄さんだった。彼が言えば、ほかの2人もさっと引いた。どうやら、ここまでが予定調和のようだ。

「ありがとうございます」

「べ、別にお前のためじゃない」

照れくさそうな彼の顔に、ああ、ツンデレってやつか、とアレイスタは思った。女の子ならともかく、おっさん（というほどの年にも見えないが）のツンデレは実に微妙な気分させられる。人間素直が一番だ。

微妙な顔をしたのがわかったのか、後ろの背高さんとイムホテップが顔を見合わせてやれやれというリアクションをしたのが見えた。どうやら、ここまですが本当の予定調和だったようだ。やれやれ。

「改めて。

ワシがイムホテップじゃ。

ホップと呼んでくれ」

改めてと言って再度手を握ったイムホテップに続き、彼を押しつけた背高さんがアレイスタの手を握った。

「はじめまして。

ステファン・スクルドです。

ステップと呼んでね」

「はじめまして、ステップさん」

こちらに片目をつぶって愛想を振りまくステフェン氏に苦笑する。よく見れば、彼の耳は葉のように長くとがっていることに、アレイスタは気がついた。サー・エセルバートよりも色が濃く、癖の強い金髪をしている。新緑の目に白い肌。

「オレはジャン・ポール」

最後に手を握ったジャン氏は、目を合わせれば恥ずかしそうにそうらしてしまう。彼は、収まりが悪そうに、目と同じこげ茶の髪を帽子に押し込んでいた。

「はじめまして、」

と、アレイスタが返信をしている最中に、イムホテップとステフェン・スクルドが割り込んだ。

イムホテップが肩に、ステフェンが頭に――上背があるからちようどいいのだろうが、されたジャン・ポールは屈辱的だろう――腕をかけている。

「こいつはジャンプって呼んでやってくれい」

「3人そろってホップ・ステップ・ジャンプさ。」

魔道具店ホップ・ステップ・ジャンプによるこそ！」

このシツクな店は、ホップ・ステップ・ジャンプと言うらしい。じゃーん！と口で効果音を出しつつポーズを決めた3人――いやいやではあるようだが、律儀にジャン・ポールもポーズをとっている――を見て、アレイスタはリアクションに困った。

アホだアホだと思ったが、そんなことをおくびにも出さない程度の分別はある。ただ、大真面目に面白くもないネタをやっている大人3人を見ていたら。

「っぷ…」

アレイスタは、つい吹きだしてしまった。

それがよかったのか悪かったのか。

妙に嬉しそうなイムホテップとステフェンは、なぜか4人でのポーズを考案し始め、少し照れくさそうなジャン・ポールもなぜか乗り気な様子で熱心にうなずいて会話が進み始めた。ちよつと待ったちよつと待った！

「あの、私はちよつと…」

決めポーズに参加したくない、と抑えるように手をあげた状態で、振り向いた3人と目があつた。

…とても輝いている。

ああ、こういうとき、当たり障りなく断るにはどうすればよいのだ、とアレイスタは冷や汗をかいた。職人は職人であるからして、例えここで気分を害してもきちんとしてくれるだろう。しかし、仕事を依頼する身としては楽しく仕事をしていただきたい。

アレイスタは博士とある意味引きこもり生活をしてきたため、対人能力が低い。何せ話したことがある人物も片手で足りるほどだったのだ。

そして透子は、なんというか典型的な日本人だったので、直接的な断り方というのはまずしない。遠まわしな婉曲表現バンザイ。

ああ、視界の端でサー・エセルバートと女性が応接セットに腰掛、いつの間にかお茶を始めているのが見える。にこやかにこちらを見ている。

「∴その、紹介者の立場ですので！」

躊躇いなくサー・エセルバートを巻き込むことにした。そう、自分ができなければ助けてもらえばいいのだ。

これぞ透子が社会人になって身に着けた中、もっとも役立つビジネススキル。『面倒ごとはよろしく』解決法である。投げ先は上司だろうが同僚だろうが部下だろうが、自分でなければどうでもいい。メリットとして面倒ごとはなくなるが、デメリットとして人望を失っていく。かつこよく言えば諸刃の剣だ。

軽く目を見張ったあと、面白そうに笑うサー・エセルバートが見える。

3人はくるっと後ろを向き、サー・エセルバートを見た。素材を吟味する目になっている。

「やりませんよ？」

にっこりと例の笑みを浮かべてきっぱりと断るサー・エセルバートに、内心拍手を送る。

「やりません」

残念そうな顔をした彼らを見て更に念を押している。肩を下げる3人にちよっと心が痛んだが、まあ仕方ない。

でも、サーエセルバートがアホなポーズをとるのはちよっと見たかった。

視界の隅で文字が踊る。

【面倒ごとは回避しました】

【スキル「面倒ごとはよろしく」を取得しました】

どうせなら、NOといえる日本人の称号がほしい。

009 もうちょっとなんとかしてください

アホなことをやって時間をつぶしたが、3職人とアレイスタも、栗鼠嬢とサー・エセルバートの座っている応接セツトに着いた。

お誕生日席に着いていた栗鼠嬢が、にっこり笑って紅茶と焼き菓子薦めてくれる。美味しい。生活水準があまり変わらないのは素晴らしいことだ。

高い窓から入ってくる風が心地よく、市場の喧騒がかすかに聞こえてきた。

「…さて、じゃあ、改めて話しを進めさせていただこうかね」

軽く咳払いをしたイムホテップの声に、アレイスタは姿勢を正した。

魔道具というのは、特に量産版でないものは、非常に高価なものだ。

量産版は、家電のような扱いで庶民層にも馴染んでいる。が、それも服でいうならプラポルテ。一般庶民から見れば高い。

それが量産版でないとどうなるか。アレイスタは値段に検討もつかなかった。株やダイヤモンドのようなものだろうか、とは思う。思いはするが、いずれにも馴染みのないアレイスタや透子には相場がまったく分からない。

ただ、ふざけていいものでもないだろう、という認識だ。

そんなアレイスタに、席に着いたメンバーが軽く苦笑した。イムホテップが言葉を続ける。

「はじめに、全体の流れと、今日の打ち合わせの流れ、この2つの

進め方を決めませんかね。

まず、我々がよくやる決め方を説明させていただきたい。
問題なければ、今回もその流れにしたいと思っております」

いかがかな、というイムホテップに、サー・エセルバートを少し見る。彼はあまり話に口を挟むつもりはないようだった。普通に茶を飲んでいる。

私に決めろということかな、と頷く。

「はい。」

流れを教えてくださいいただけますか」

イムホテップが説明してくれた流れは、こうだったものだった。

全体の流れとしては、最短で3回の打ち合わせが必要。

1回目（今回、無料）。

依頼者が要望を伝える。

要望というのは、効果や利用イメージ、利用タイミングといったものの他、作成期間や値段。

要望を聞いて、職人たちは実現性検証を行い、見積もりを作成する。

見積もり作成は一律300ルラン。

この段階で実現が難しそうだったら、職人はそう伝えるので、見積もり依頼しないほうがいい。

2回目（大体1週間以内）。

見積もりを元に、依頼者の要望と条件のすり合わせをする。

ここでGOサインが出たら、職人は作成に取り掛かる。

この後3日以内に、依頼者は前金を支払う必要がある。

3回目。

作成された魔道具を依頼者が確認する。

「：いつもは、こういった流れです。

どうですか」

正直、時間はかけたくない。それに、見積もりにかかる値段を言われてもよくわからない。普通はどれくらい時間がかかるのか、人件費がどれくらいか、技術料がどれくらいか。相場がわからないし、こういった場合に値切るものかさえ判断できなかった。

確か、博士と2人、1週間分の食料を届けてもらうのに、レネ爺さんにお礼の食事と手間賃の30ルラン、食料代の150ルランをミス・リップに払っていた。：からまあ妥当そうだと思う。思うがよくわからない。

よし！とアレイスタは決めた。

考えてもわからないので、考えないでいいだろう。何かあったらサー・エセルバートがケチをつけるんじゃないだろうか。茶をすすってるのだからそれくらいしてくれてもいいだろう。あんまり時間がかかるなら旅先に送ってもらってもいい。

にっこり笑ってうなづく。

「その進め方で問題ありません。
本日はよろしくお願ひします」

視界の隅で文字が踊る。

【検討事項をスルーしました】

【今までスルーした検討事項の通算が300になりました】

【スキル「スリー・ワイズ・モンキーズ 不見、不聞、不言」を取得しました】

：見えない、見えない。

「ありがとうございます。

あとは、今回の打ち合わせで、要望の魔道具の性質に合わせて担当者を決めたいと思っております」

この場にいる3人は得意分野が違うのでね、と 髭をなでながら頷いたイムホテップの言葉を、ステフェン・スクルドが継いだ。

「ホップは武器、エセルバート卿の持ってる武器なんかは彼が面倒を見てる。

僕は防具で、ジャンプは何でやるよ」

なんとなく、人物と得意分野が合っていない気がしたが、アレイスタは口には出さなかった。

いかにも穏やかな幅広さんことイムホテップは攻撃的でないし、軽いおどけた雰囲気の高さんことステフェン・スクルドは守りになど入りそうにない。ツンデレ小柄なジャン・ポールは要領が悪そうだ。ただ、彼は器用貧乏というとしっくりくるかもしれないが。

ちなみに、と笑って目の前のステフェン・スクルドが続けた。ばちん、と気取って片目をつぶって見せる。

「君が所有することになった、ロザリア博士の『お下がり下郎！01号』は僕の作品だよ。

大事にしてね」

：聞き間違いだろうか、とアレイスタは思った。

「はい？」

「魔道具だよ、銀色の懐中時計の形をした」

なるほど、OSGR-01という型番は、そういった意味だったらしい。

亡くなった博士のを容貌を思い浮かべたアレイスタは、似合っていると感じそうになったのを押さえ、あいまいに微笑んだ。

日本人的なお茶の濁し方で何が悪い、と思う。大丈夫、視界の隅で文字が踊っても気にしない。無難な人生万歳。

「：実は使い方がよくわからないので、後で教えていただけますか？」

「了解しました、お嬢様」

おどけた仕草で笑ってみせるステフエンに、お願いしますと頭を下げた。

話が進んでいる間に、ちょっと考えた風のジャン・ポールが、お弟子さんの1人を呼んで指示を出した。お弟子さんがなにやら機材を運んできた。小さな水晶玉がつながっている箱と、ペンのようなもの。これも魔道具だろうか。

「では、要望をお聞きしましょうか」

「はい。」

私は、同胞を探すために、旅に出ようと考えています。

それで、身を隠すための魔道具を」

持っておけとサー・エセルバートに言われました。とは言えない。
と、サー・エセルバートが口を挟んだ。

「…その、彼女のステータスを見ながらにしませんか」

アレイスタが水晶玉に手を置いたら、箱のようなものから光が飛び出し、壁に文字が映し出された。なるほど、この魔道具は映写機プロジェクタ的な使い方をするものだったらしい。では、あのペンのようなものは指示棒ポインタのようなものだろう。

ステータスを見た人々は、特に何も言わなかった。

たぶん、彼らはすでに知っていた。ただ映し出したほうがズレもなくなるし、アレイスタも参加できるから都合がよいと判断したのだろう。

…と、思ったのだが。

正直、ステータスを見たのが初めてのアレイスタも、ゲームをやるらない透子も、見てもなにも分からない。だって平均を知らないのだ。せいぜい、自分のステータス内で、これが高くてこれが低いんだなーということしか分からない。

誰か解説してくれないかな、とちらりと視線を上げる。

壁近くに座っていたイムホテップとサー・エセルバート、栗鼠嬢は壁の文字を見たまま、目の前に座っていたステフェン・スクルドがなんか目をそらした。横のジャン・ポールを肘で突いている。ジャン・ポールは嫌な顔をして身じろぎしていたが、アレイスタが見

ていたことに気づくと軽く咳払いをした。

…この時点で、どうやら彼らは、アレイスタにステータスの説明をしたくなかったのだ、と気づいた。

「ええと…。

魅力と…運、を。

何とかしたほうがいいんじゃないか」

「…やっぱりそう思いますか」

サー・エセルバートが同意の声を上げた。

「普通に生活を送る分には、なんとかならなくもない…かもしれないがね。

お嬢ちゃんは、1人で旅をする予定なんだろう？
なんとかしといた方がいいだろうなあ」

イムホテップが、髭を撫でながら同意した。
ステフェン・スクルドが、うんうんと頷く。

「誰かしら一緒にいてくれればいいけどねえ。

1人だと寄ってくる面倒ごとを回避するのもしんどいんじゃないかなあ。

本当は、何か攻撃手段も作ってあげたいけど…」

腕を組んで、イムホテップがうめく。

「…これは、ちょっとなあ…。

もうちょっと、なんとかならねえか」

サー・エセルバートが頭を下げた。

「すみませんが、もうちょっとなんとかしてあげてください」

ステフェン・スクルドが同意した。

「僕も、もうちょっとなんとかしてほしいなあ。

『お下がり下郎！01号』はそこまで頑丈にできてないんだよ。
あんまり頻繁に使われたくないなあ」

ジャン・ポールがわめいた。

「それはもうちょっと頑丈に作っておけよ！
それに、なんで全部オレに言うんだよ！」

すみません。

なんだかよくわからないけど、もうちょっとなんとかしてくだ
さい。

でも、どうやら担当はジャン・ポールに決まりそうだというのは、
アレイスタにもわかった。

010 ジャンプ氏によるアレイスタのステータス解説

ステータスとは、概要、加護、称号、スキル、能力値といった、その個人に付随した項目をまとめて指す。

概要は、名、外見的特徴や年齢、適応属性といったものが記されている。所有魔道具も確認できる。

加護は、神から与えられるもので、能力値への補正および副次効果が与えられる。大抵は、運と何か。

ちなみに、神は主に2種に分かれる。幸運を与えてくれるものが善神、悪運を与えてくれるものが悪神である。

称号自体は大した意味はない。なんらかの条件を満たした場合に与えられる。称号取得がスキル取得の条件になっている場合が多い。

スキルも、取得自体は称号とあまり変わらない。

常時発動型と逐次発動の2種に分類される。スキル自体にレベルが設定されており、レベルが上がるほど効果が大きくなる。効果はさまざま。能力値への補正もある。また、スキル自体が成長するものも多い。

能力値は、個人の能力を数値で表したものである。これは、種族特性に基づき生まれつき割り振られたものが元だが、その後の生活や訓練により成長がある。当然、逆に退化もある。

また、加護やスキルにより補正が入る。

…と、ジャン・ポールが説明してくれた。

どうやらいわゆるステータス画面で確認できるものが、一くくりでステータスと呼ばれているようだ…。

魔道具で壁に映し出されたステータスを眺めながら、透子の記憶を元にアレイスタは考えた。多分、個人で確認できるようになるというのも、ステータス画面のことなのだろう。アレイスタはできないが。

ジャン・ポールが言いにくそうに解説してくれたアレイスタのステータスは、ようするに、こういうものだった。

人ごみにいれば、魅力のせいで目立つ。

運が人よりひどく悪いので——特に幸運がまったくないので——、何か問題があれば大抵巻き込まれる。

面倒ごとに巻き込まれても、残念。

攻撃を受けたとしたら、直接攻撃であれ魔法攻撃であれ、感覚が鈍いので、当たってから攻撃を受けたことに気づく。そして、体格に恵まれていないので、攻撃が当たったら多分アウト。

じゃあ先手必勝で先に何かできるかというと、これもまた残念。直接攻撃を行うには、感覚が鈍いせいでの的に当たらない。そして、力が弱いので当たってもあまり意味がない。

魔法攻撃を行うにも同様に鈍さがネック。魔力はあるのに、どうも、魔法という感覚自体になれてない。

「…と、いう感じ、なん、だ、が…。」

総合値は悪くないが、はっきり言うと、バランスが悪いというか。残念というか…。

…その、まあ、何だ。

元氣出せよ！」

聞いたステータスの特徴は、甥っ子が言ったとおりだった。

気の毒そうに、こちらを気遣うように、ちらちらと向けられる視線が痛い。

空気が重い。

が、それを完全に無視したように、イムホテップが気楽な声を出した。

「しかし、お嬢さんは変わった称号やスキルを多く持ってるねえ。ここらへん、」

といいながら、イムホテップが壁に映し出された文字をさしたのを見て、あれ、とアレイスタは首を傾げた。他と違って詳細が写されない。

「詳細が公開されとらんし、ワシは見たことない。なんだろうねえ」

指された先の項目としては、称号「リトル・マーメイド乙姫」、エイリアン「靴の中の石」、ユニークスキル「控えよ僕」、「八尾比丘尼の素」の4つ。能力値補正以外については詳細がわからない。

わからないが、なんとなく予想がつくものもある。が、言う気にはならなかった。

大体、「八尾比丘尼の素」って。食われる前提じゃないか。

苦笑いを浮かべるしかない。

「…その、あの、でも、珍しいですよ！
普通、5つも加護を持っていますせん」

その場の空気を換えようとしてか、栗鼠嬢がなんとかフォローのための言葉をつむいでくれたのだが。

「いや、でもこの「自己愛の神の偏愛」は微妙じゃないかね。

この幸運の項目を見ると、マイナスの加護になっとる。

こっちの3つがなかったら0以下になっとるぞ」

「たしかに、こっちの3つは、それぞれ気の毒に思った神々が何とかがんばったって感じだよねえ。

ミラクル
「生きている不思議」なんて称号、初めて見たよ」

イムホテップがぼっさりと切り、ステフェン・スクルドに止めを刺された。栗鼠嬢が横目でにらんでいるのにも気づいていない。

目の前のジャン・ポールは頭を抑えている。きつと2人とも、職人特有のスキル「—AKY（あえて空気読まない）」を身につけているに違いない。

ここで話題にしているとおり、アレイスタには5つの加護がついている。

「自己愛の神の偏愛」で悪運＋5と幸運－3されたのを、「トイ

レの神の慈悲」、「洗濯の神の同情」、「芋の神のお情け」がそれぞれ幸運をひとつずつ＋1してくれている。もうひとつは、「貧乏籤の神の寵愛」で、これは悪運を10上げている。

副次効果もぱっとしない。特に、悪神の2つ。「貧乏籤を引くとき、必ずアタリを引くことができる」「かっこいいポーズを取って、相手を挑発することができる」なんて、何に使うのだ。

「ね、このかっこいいポーズって、やってみてよ！」

明るいステフェン・スクルドの気楽な声がいらっとくる。彼は常時発動の挑発スキルを持ってるんじゃないだろうか。

寒くなってきましたね、と栗鼠嬢がさりげなく席を外した。言われて見れば少し肌寒いし、何か起きたのか通りが騒がしい。いそいそと高窓を閉め始めた彼女の空気読みスキルは高いのだろう。

「ええと、巻き込まれるのは前提なんですか？」

アレイスタが尋ねると、ジャン・ポールが顔をしかめた。

「これだけ運がないとなあ…。」

巻き込まれた後は、これは文句なく高い知力を活かし、何とか交渉で活路を見出すのがいんじゃないか

「…まあ、いざとなったら、トイレに隠れて歌えばいいですよ」

と、スキルを見ながら慰めるようにサー・エセルバートが言った。彼が見ているのは、スキル「トト」と「ローレライの歌」だ。

「トト」は、水周りのトラブル解決のほか、水周りにいれば相手の敵愾心をそぐことができるという。

「ローレライの歌」は、対象を誘惑することができる。
実際、アレイスタができる最大の対処はこんなところだろう。ト
イレの神様様である。

「やっぱり、運と魅力が最大のネックだな。
これを何とかしないと」

ジャン・ポールが腕を組んで考え込んだ。他も異論はないようだが、アレイスタは釈然としない。

「その、そんなに私は運がないんですか？
今まで普通に生活できていましたし」

「さっきも言ったが。
これだけ運が悪いと、何か起きたら間違いない…」

「きゃあああああ！」

と、高窓を閉めていた栗鼠嬢が悲鳴を上げた。
なんだ、と振り向く間もなく、思い切り体を引き倒される。目の
前にざっと何かが突き出された。白い羽がぱつと舞う。

アレイスタは、一瞬遅れて、それがジャケットに包まれた腕だと
気づいた。サー・エセルバートが、横に座っていたアレイスタを引
き寄せて、襲来した何かからかばってくれたらしい。

襲来した何か。

カッとローテーブルに着地し、コケコッコと高らかに啼いたの
は、ごく普通の鶏だった。

2羽。

どうやら市場から逃げ出したらしい。

騒がしかったのはこれが原因か、とアレイスタは思った。サー・エセルバートがため息をついている。

「…やっぱり、運と魅力が最大のネックだな。

これを何とかしないと。

これだけ運が悪いと、何か起きたら間違いなく巻き込まれる」

「…はい、お願いします」

高窓から進入し、サー・エセルバートに払われた鶏は、なぜか2羽ともアレイスタの膝の上に収まった。

上機嫌で時々啼くのがうるさいし、食い込む爪が痛い。

視界の隅で文字が踊る。

【鶏に気に入られました】

【鶏、猫、犬、ロバのそれぞれの種族に気に入られました】

【称号「家畜たちのお気に入り」を取得しました】

【スキル「ブレイメンの指揮者」を取得しました】

そういえば、宿屋で犬猫になつかれて、来る途中にロバに甘噛みされたな、とアレイスタはぼんやり思い出した。啄ばまないでほしい。

「おや、増えたのう」

「ねえ、このブレイメンの指揮者ってやってみてよ！」

気楽な声に殺意が沸いた。

011 まあ魚人ですからね

結局。

担当者は予想通りのジャン・ポール、方向性は運と魅力を何とかすること、形は1人で持ち歩いていても目をつけられないようなもの、で見積もりを依頼した。

要するに、当初予定どおりの、目立たず、巻き込まれず、のための道具となった。妥当じゃないか？、というジャン・ポールのお墨つきだ。他の2人は、少し残念そうな顔をしていたが。

見積もりが出来たら、宿屋に連絡をくれるという。

：巻き込まれた後は、まあ、大人しくトイレで歌を歌おう。

ついでに、ステータスを非公開に設定して、ステフェン・スクルドに『お下がり下郎！1号』の使い方を習った。と言っても、あの魔道具で表示されているステータス画面上で、ペンのような魔道具を使って設定変更しただけである。ステータスの公開設定をオフに、所有魔道具欄OSGGR-01の待機設定をオンに。

『お下がり下郎！1号』の待機設定をオンにした瞬間、懐中時計の表面に目が現れ、にんまりと笑った。

そのホラーな外見に、アレイスタは軽く引いた。

「適応属性に合わせて仕様が変化するように作ってあるんだ。今日は遅いから、オンにするだけにしておくけど、次回は調整するから」

もし使ったら教えてねー、と手を振って送り出された。

ちなみに、鶏は、持ち主が引き取りにきました。

リアルドナドナに心が痛まないでもなかったが、アレイスタは美味しく頂く立場なので文句は言えない。が、へたれなので視線は逸らしました。ごめんなさい。

アレイスタの心を悟ってか、悄然と去っていく姿が哀愁をそそった。

気を遣ったらしいサー・エセルバートが話しかけて意識を逸らしてくれたのが、少しありがたかった。

階段を降りたところで、横から声をかけられた。

「おい、エル！
エセルバート！」

そちらを見れば、2頭の馬からそれぞれ人が降りてくるところだった。紺色の制服を着ている。どうやら、兵士のようだ。

声をかけられたサー・エセルバートは、動きを止め、苦いものを嘔み潰したような顔をしている。ゆっくりと振り向く動作を見て、ああ、彼は関わりたくなかったのだなとわかった。

その気分がわかってか、1人はしてやったりという顔をしているが、もう1人は軽く肩をすくめている。

「…どうした。」

見廻りの時間はもっと早いだろう」

「どっかの通りすがりが、人買いの下っ端を捕まえてくれたからな。取調べが長引いたのさ」

おかげでこの時間だ、と肩をすくめながら、馬を引いて近寄ってくる。サー・エセルバートがそれに合わせて微妙に腕を引いた。彼の腕を掴んでいたアレイスタは、必然的に一緒に下がることになる。兵士が、面白そうに片眉を上げたのが見えた。

「で。」

紹介してもらえねえの？」

「おい」

にやにやと笑っていた兵士が、サー・エセルバートの肩ごしにこちらを見下ろしてくる。後ろからついてきた兵士が嗜めるように声をかけたが、引く気はなさそうだ。

ため息を吐いたサー・エセルバートが、わずかに体を寄せる。軽く腕を放されたので、フードを外そうとしたら、頭にぽんと手を置かれた。どうやら、外すなどということらしい。

仕方がないので、軽くフードを引き上げ、顔を覗かせた。相手の顔も見ずに挨拶するわけにはいかない。日本人特有の愛想笑いを添えて。

ら、相手が思ったよりも近くにいて驚いた。サー・エセルバートの肩に腕をかけてアレイスタを覗き込んでいた。息を呑む音が聞こえた気がしたので、相手も驚いたのかもしれない。

近くにいた彼が笑っていた方だろうか、骨格が太く、かなり体格に恵まれている様に見えた。サー・エセルバートと同じ位の高さだ

が、がっしりとして見える。真ん丸く見開かれた目は、琥珀色。短く刈り込まれた同色の髪はこめかみ辺りに黒メッシュが入っている。口から覗く牙。匂いから判断して獣人。

それを見て取り、アレイスタは嫌な予感がした。

その男性をアレイスタから離すように、サー・エセルバートが腕を入れて胸を押した。彼は、今度はそれに逆らわずに下がる。それでようやく、アレイスタはもう1人を確認することができた。藍色の髪と目、象牙色の肌をして、この世界では珍しく眼鏡をかけている。こちらは、中肉中背といったところか。他の2人に比べたら小さい。

「こいつらは同期です。」

こちらは、従妹のアレイスタ嬢」

サー・エセルバートと同種の仕事をしているらしい。どうもお廻りさんみたいな感じみたいだが、似合わんなあと思う。従兄殿の押し強い性格は、政治家かヤクザのほうが向いているだろう。もっとも、それを顔に出したりはしないが。

紹介を受けて、アレイスタは服のすそをつまんで軽く礼をした。

眼鏡の人が、はじかれた様に自己紹介をしてくれる。

「はじめまして、アレイスタ嬢。

オットー・ペインです」

彼は横でぼうっとしているもう1人を肘で突いているが、こちらはアレイスタをじっと見たまま反応しない。正直、視線で穴が開きそう。サー・エセルバートは完全に彼を無視している。

「アレイスタ・ゴメスです」

差し出された手を取って笑顔に向けた。透子ことアレイスタにとって、愛想笑いはデフォルトである。

と、横で体格のよい彼が声を出した。

「…いい…」

そちらに顔を向けて、思わずアレイスタは鳥肌を立てた。ちよつと、今舌なめずりしましたよこの人！

思わずドン引きしたアレイスタに対して、男は肉食獣の動きで近づいてきた。

止める間も有らばこそ、がっとうきしめられる。

彼は、アレイスタの首の辺りに顔を寄せ、すんすんとおいを嗅いだ。

視界の隅で文字が踊る。

【虎人の誘惑に成功しました】

【猫化動物および猫化獣人の誘惑に成功しました】

【称号「猫まっしぐら^{カルカン}」を取得しました】

【スキル「猫まんま」を取得しました】

していないしてない誘惑してない！

心の中で悲鳴をあげる中、恍惚とした声が届いた。

「超イイ…」

すっげ旨そう…!!」

「っひいいいいッ!」

怖い怖い怖い!! 旨いって字がおかしい!

喉の音がごろごろと聞こえるのが余計に怖い。

舐めないで! 痛い痛い! 削られる! 何か減る!!

と、アレイスターの悲鳴を聞いて、呆気にとられていた2人が動き始めた。

「離れろ!

このクズ!」

「つちよ、ヴィンス!

なにやってんだよ!」

鬼のようなサー・エセルバートの怒声と、眼鏡のペイン氏の悲鳴じみた声が響く。サー・エセルバートに顔面を鷲づかみにして引き離され、ペインが男を後ろから羽交い絞めにし、なんとかアレイスターは解放された。

恥も外聞もなくサー・エセルバートの背中に隠れてしがみつく。

何この人。怖い、超怖い…!

「この変質者が…」

「ヒッ!？」

「痛エ痛エ痛エ痛エ!

潰れる、つぶれるって!」

「! エセル様…!？」

メキメキメキと音がするのに気づき、慌てて止めに入ったアレイスタは、サー・エセルバートの顔を見て軽く後悔した。紳士の仮面が剥げて、地獄の鬼もかくやとばかり、実に恐ろしい顔をしている。いつも笑顔で怖いと思っていたが、笑顔が剥がれたらもっと怖かった。途中悲鳴を上げたペインは、これを見たに違いない。

正直、初対面の相手などどうでもいいから見なかったことにしたい。が、男の後ろからこちらに注がれるペインのすがるような眼差しに、しぶしぶ動く。

「あの、エセル様、もう」

「…すみません、ターシャ。」

無礼なヤツで」

我に返ったのか、にっこりと笑顔が向けられた。男の顔を驚づかみにしたままだが。

この怖い「いつでも笑顔」は、剥がれている方がよほど怖いということを目撃した後なので、なんとも言えない気分を味わう。

「その、大丈夫ですから」

だから離してあげてください、と言えば、優しいですねと返される。そういう問題じゃないと心の中で悲鳴をあげつつ、引きつった笑みを浮かべてあいまいにごまかした。単純に、目の前のスプラッターも怖いだけだ。

012 能力値の有効活用

アレイスタを急襲した男は、サー・エセルバートに驚づかみにされた顔が痛むらしく、あごをさすっていたが、アレイスタの視線に気づいてにかっと笑った。

「俺はヴィンセント・バーン。

ヴィンスでいい。

よろしくな、ターシャ嬢」

手を差し出された。気がつけば愛称で呼ばれている。サー・エセルバートが呼んだのを聞いていたのだろうが、なんというか、実になれなれし…もとい、人懐こい人物だ。

なんとか笑顔を浮かべて手を取ろうとしたら、伸ばそうとした手をサー・エセルバートに握られた。彼は同時にバーン氏の手を叩き落としている。見事な早業。

「痛ッてエ…。

勘弁してくれよ、この馬鹿力」

「死ね。

即座に死ね」

「ははははは…」

バーンは叩き落とされた手を痛そうに振っているが、対するサー・エセルバートはクールなものである。貼り付けたような笑顔だが、綺麗に磨いたブーツについたナメクジを見るような目をしている。おそらく、隙を見せたら即座に塩をかけるだろう。

ペイン氏が乾いた笑いを浮かべている。アレイスタは、彼にシンパシーを持った。その小市民的な態度がまことに好感が持てる。よく見れば少し顔も凹凸が少なめだ。肌も象牙色だし、実にいい。彼の一族は東の方の出身なのかもしれない。

しかし、とアレイスタは思った。

2人とも、仮面が剥げたサー・エセルバートに案外、普通に接しているところを見ると、ひょっとして彼の仮面はしょっちゅう剥げているのかもしれない。

「しかし」

ずいど身を寄せられた。ひいと心の中で悲鳴を上げ、一步踏み出してかばってくれたサー・エセルバートの背中に逃げる。失礼かとは思ったが、怖いものは怖い。なんていうか、本能的に。

すん、と鼻を鳴らす。

「旨そうな匂いだよなあ。

他の獣人からは、こういう匂いがしたことはなかったんだが」

首を傾げて、ターシャちゃん、なんの獣人？と尋ねられた。それで、そういえば、ホップ・ステップ・ジャンプの店で、ステータスを非公開に設定したのだと思い出した。たしか、スキル「力量把握」を持っているサー・エセルバートは非公開設定でも見えると言っていたので、これはレベルの違いか、もしくはスキルを持っていないのだろう。

「はい。

私は魚人です。

魚の、獣人で」

「へえ、珍しいなあ。

だから今まで嗅いだことがなかったのか」

魚人は珍しい。アレイスタは、博士からそう聞いている。集落を見たという話も聞かない。

なんでだろうと思っていたが、甥っ子に聞いた話を思い出した。たしか、彼は、魚人は人気がないらしいと教えてくれた。オンラインでまったく見かけないらしい。どうやらゲーム達者な方たちは、半端スベックな魚人を選択しなかったのだろう。

魚人が珍しいのは、おそらくそれが原因である。

「魚人ってのは、こんな旨そうな匂いがするんだなあ」

すすすん、と鼻を鳴らしながら、こちらに近づいてくる。笑顔で間に入ってくれるサー・エセルバートに感謝しつつ、ずっと後ろに隠れた。試しにと齧られでもしたらたまらない。バーンをたしなめているペインが苦笑しながら同意した。

「たしかに、魚人は珍しいね。

さすがゴメス家ってところ？」

「いや、彼女は伯母の養女だ」

「へえ？」

ゴメス家はある意味有名な家系である。

獣人は、人態のほか、獣態が取れるかどうかが判断の基準となる。獣人の子が獣人とは限らない。混血が進めば、逆に獣態を取れなくなり、獣人の粹から外れる。ゴメス家は、混血が進んだ例としてよく挙げられる。

元々ゴメス家は傭兵として有名な家系だ。傭兵として強さを貴しとし、混血が珍しい時代ながら、強いと分かった血を積極的に取り入れていた。開祖は、熊と鰐の形態が取れたという。それが、獣人でなくなったのは7世代ほど前。当初の常識で獣人は増え続けると思われてたため、公表されたときは酷く驚かれたと言う。

サー・エセルバートの母親、ローウェル女伯爵の家系は、若い狼家の名のとおり狼の獣人が祖であり、彼女も獣人だったが、ゴメス家と血が混ざった2人の息子は獣態を取れないため、人間である。

彼らは、つまりゴメス家なら珍しい魚人と縁続きでもおかしくないと考えたのだ。それくらい混血の多い家なのである。

アレイスタは、サー・リチャードとサー・エセルバート、それに博士が、獣人でなくて本当によかったと思った。虎も洒落にならないが、熊も洒落にならない。木彫りの熊の鮭のようになるのはごめんである。

「早く見廻りに戻ったらどうだ」

笑顔だがあからさまに目が笑ってないサー・エセルバートに、バーンが肩をすくめた。ペインも苦笑している。だが、実際長々と休んでもいられないのだろう、彼らは大人しく馬上の人となった。

ペインが軽く手を上げる。

「またそのうち飲みに行こう」

「ああ」

「ターシャちゃんもおいでなー」

付け足したバーンに、サー・エセルバートが冷たい目を向ける。
バーンはそれを笑っていない。

「あ、そういやあ、なんかお前の同僚がうろついてたぜ」

またなターシャちゃん、と付け足して馬首を返した。

少し考え込んだ様子のサー・エセルバートに視線を向ける。バーンの言ったことの意味がわからなかったのだ。

物問いた気な視線に気づいたらしいサー・エセルバートが、軽く苦笑した。

彼は、ちょっと散歩をしながら帰りませんか、とアレイスタを誘った。歩きながら、小さな声で説明をしてくれる。

「彼らは、司法隊の所属なので、私とは所属が違います。
今アレが言った同僚は、私と同じ所属の隊士がいたということですね」

と、言った後、軽く咳払いをする。

「今から私が言うのは、独り言です。
…私が属しているのは近衛隊。」

役割は、まあ、王族の私兵です。
普段は街中には下りてきません」

あ、なんか嫌な予感がする。

「エセル様、もう結構です」

「話が早くて助かります」

何か起きたら、あなたは巻き込まれそうなので、と笑ったサー・エセルバートに苦笑を返しながら、食えないヤツだと思う。

このあたりに彼の同僚がいたということは、ようするに、王族に何かあったということだ。

そして、駆けつける気はなさそうな様子。休暇中には仕事をしないという主義かもしれないが、散歩としてエサのアレイスタを連れまわして、何か起きた時の囀に使う気なのだろう。

…内心この野郎とは思うが、まあ世話になっているのだ、これくらいは付き合おう。大体、何も起きない場合の方が多いはずだ。

のんびりと歩いている途中、少し会話が途切れがちになった。馬車の中では、彼は退屈をさせないように、実に見事に話をつないでくれていた。つまりこれは、周囲に何がしかの注意を払っているのだろう。

ぽつぽつと話しながら、ああ、甥っ子はどうしているかなあ、とアレイスタは思った。

彼女は、思い出してから、暇があれば甥っ子のことを考えている。甥っ子は、透子にとって最優先事項だった。そして、博士を失ったアレイスタにとっても最優先事項である。

透子ことアレイスタの特徴は、その気楽な精神構造だろう。

彼女は考えても仕方ないことは考えない。考えても仕方ないことは、考えるだけ無駄であるとさくっと放置する。極めて合理的な精神構造をしていた。

驚きの立ち直りの早さは、会社にあつて「驚くべきストレスコントロール力」と感嘆されたものだ。一応、反省はするのだが。

だが、欲望はまた別次元の話である。

甥っ子は、かわいかった。それはそれはかわいかった。とんでもなくかわいかった。大事なことなので3回言った。

客観的に見ればどうかかわからないが、透子から見てダントツだった。

小さい頃の、あの福々としたもみじの手を握ったときは、これが幸せの形かと感動したものだ。

最近は、あまり手をつないでくれなくなったが、それでも。少しずつ大きくなってくる手が、その成長がどれほど透子の喜びとなったか、あの子は知らないだろう。

わさわさと手を動かしながら、遠い目をしてその感触を思い出す。

ああ。

ひーちゃんと手をつなぎたいなあ…。

ぼうっと考えていたら、サー・エセルバートに声をかけられた。

「ターシャ。

あなたは実に見事に、私の予想以上の結果を出してくれますね。
素晴らしい」

その感心したような声に、アレイスタは首をかしげた。
なんのことだ、と視線の先に目を落とせば。

「…え？」

半泣きの少年と、手をつないでいた。

013 拾い物は厄介ごとの予感

うわー…

これ、私が拾ったのか。

自分が手をつないでいた少年を見て、アレイスタは微妙な気分を味わった。

さすがに手遊びに引っつかんで来たわけではないと思うが、自信がない。なにせ、手をつないでいた自覚もなかったのである。

おそらく、餌のついていない真っ直ぐな釣り針に自ら掛かった魚を見つけたら、こんな気分を味わうのではないだろうか。まあ、実際アレイスタが釣り糸を垂れようものなら、魚は喜んでかかってくれるだろうが。むしろ直接釣果入れのバケツに入りかねない。

ちなみに、手から伝わってくる感触から、脳は”甥っ子の感触じゃないね”と伝えてくる。変態くさいというなかれ。愛情のなせる業である。

さてどうしようとアレイスタが考えていた間に、サー・エセルバートは懷から取り出した魔道具でなにやら連絡を取っている。携帯電話のような使い方をしているそれは、通信石のハイエンド版だろう。

と、ぎゅっと手を握られた。見下ろせば少年が泣きそうな顔のまま前を睨んでいた。

：構えということだろうか。

アレイスタはざっと少年を観察した。

身長は、甥っ子が6つのときくらいだろうか。少し古臭く地味な色味だが、仕立てのよい服を着ている。今は明るい色味でひらひらと靡く服が流行っている様子なので、体に沿ってきちんと仕立てられた彼の上着は、いかにも型遅れで礼服じみて見えた。今となっては、おそらくきちんとした場面でない限り見ない代物ではないだろうか。元は裕福な家の子が、落ちぶれる前のお古を着ているといった雰囲気だ。もっとも、博士のお古のグレーのドレスを仕立て直して着ているアレイスタのほうが、よほど古臭いだが。

だが、地味な色味の服を着ているから目立たないかというところでもない。

横に見えるふわふわとした金髪は輝かんばかり。けぶるような金髪のサー・エセルバートとは正反対の、実に派手な色合い。

覗く耳は、先ほど会ったステフェン・スクルドとよく似た葉のような形をしているが、同種ではないだろう。彼の森のような匂いは異なる、少し不思議な匂いがする。乳臭さが混ざったというわけでもなさそうかな、と思う。

なんというか、どうも全体的に派手な存在だ。しかし、途中で転びでもしたのか、全体的に少しすすけて見える。仕立てのよい服が台無しだ。サー・エセルバートの話しぶりからは王族のようだったから、服は変装なのだろうが、明らかに失敗して酷く悪目立ちしている。

先ほどから周囲の視線が痛い。

実際のところを言えば、アレISTAは自分もいるだけで目立つ存在だということを忘れている。たとえフードを被っていても目立つのだ。おかげで相乗効果で目立っているのだが、そこは本人が気づかない。

さて、構うにしても、どう扱おうか、とアレISTAは思案した。

完全な幼児だったらよいが、甥っ子もこのくらいから子供扱いを嫌がり、気難しくなった。ちょうど、小学校に入学して友達の輪が広がった頃だ。もっとも、それも子供らしい態度で実に可愛らしかったのだが。姉夫婦が亡くなった後はさらに大人びてしまったことだし。

迷った挙句、アレISTAは特に何も言わず、手を握り返すだけにした。少年が、ゆっくりとこちらを見る。泣きそうな顔のままだが、睨みつけるような目を崩さない。目は、トルマリンのような青だった。

その顔を見て、アレISTAは気づいた。
前に、この顔を見たことがある。

それは、姉夫婦が亡くなった時だった。

…ああ、泣くのを我慢しているのか。

途端に、どうでもよかった子供に愛情がわく。優しくしてやろうという気分になった。自然に笑顔が浮かぶ。

それを見た少年が目を見開いた。くしゃりと顔をゆがめる。

「っうえ、ええっ、ん、えっ…ふえええ…ええええん…!!」

ぼたぼたと、大粒の涙を零しながら、彼はしゃくりあげ始めた。

小一時間後、アレイスタはまだ少年とともにいた。

それにしても泣く子は恐ろしい。

あの後、驚いて顔を覗きこんだアレイスタに、少年は飛びついた。首に抱き着き、更にわんわんと声を張り、泣き喚いて離れない。耳元の大音量に、アレイスタはくらくらとした。

それを見たサー・エセルバートは、アレイスタごと少年を連れて行くことにしたらしい。軽く肩をすくめた後、重さによるけるアレイスタを支えつつ、捕まえた辻馬車にやんわりと押し込んだ。

着いた先は王城だった。

威容を誇るその姿を、まさかこんなに近くで見ることになるとは思わなかったが、なにせ大泣きしている子供を貼り付けたままである。どっしりとした石造りの壁を見上げる余裕も、見事なフアサードを鑑賞する余裕もない。

本来なら、おそらく辻馬車など中に入れず、馬車から降りて門番のボディチェックが実施されるのだろう。

しかし、アレイスタは少年が離れないため、身動きが取れない。サー・エセルバートが身柄を保証し実施が省略され、そのまま馬車で行くことになった。

泣く子に縋りつかれているアレISTAを、門番は胡散臭さ半分、同情半分といった目で見送ってくれた。誤解だ、泣いているのは私のせいじゃない、とアレISTAは弁明したかったのだが、あれは多分疑われたままだ。頭を抱えたい気分になった。

そして、現在。

奥まった建物に通され、ふかふかの椅子に座っているのだが。

少年は張り付いたままだである。

部屋についたとたんに、サー・エセルバートはどこかに行ってしまった。ゆっくりしててくださいと言われたが、わんわん泣く子をつけたままだである。ゆっくりも何もない。

腹が減っているのだが、お仕着せを着た侍女に勧められた茶菓子に手をつけることもできない。このサイズの子供はかなり重いのだ。できるのはせいぜい、豪華な部屋の内装を観察するくらいである。壁や椅子には、青地に金の文様が浮いた美しい緞子が貼られている。青がテーマの部屋なのだろう。

窓の外はすでに日が落ちてきており、少年が泣き始めてから小一時間ほど経っている。

落ち着くまで好きなだけ泣けばいいと思う。思うが、それは自分から離れてからにしてほしい。

いい加減落ち着いてくれないかな。耳がおかしくなりそうだ。それに、もう腕の感覚がない。

本当だったら、そろそろ宿に戻ってご飯を食べてるころかなあ。

抱えたままぼうつと窓の外を眺めていたら、これまた美しく磨かれた金色の取っ手が回る。扉を開けたのはこちらもお仕着せを着たナイスミドル。彼がすつと頭を下げて、後ろに道を譲った。

入って来たのは、サー・エセルバートが先導した一団。いつもの笑顔を見て、アレイスタは少し力が抜けた。待たされたのは短い時間だったが、知らない場所でそれなりに緊張していたらしい。

すっかり見慣れた笑顔に続くのは、なんとなく偉そうな男女2組（だって着てるものが立派だ）。年齢はサー・エセルバートと同じか上だろうか。正直、アレイスタにはいくつかまったく判断できない。なにしろ、日本人でもなく、さらに男性はそれぞれヒゲを蓄えている。後ろに続くのは街中で見たのと同じ制服の数人。これが近衛隊だろう。女性も数人混ざっているが、こちらはミニスカートだった。すばらしい。

と、入ってきた一団を見て、少年がぱっと顔を輝かせた。

「母上!!!」

「アルヴィン!!!」

少年――アルヴィンというらしい――はアレイスタから離れて、女性の1人に抱きついた。母親である女性は、膝を折り彼を迎える。少年と抱き合う女性ごと、彼女を支えていた男性が抱きしめた。なるほど、感動の親子の再会か。

ようやくと解放されたアレイスタは、やれやれと背筋を伸ばした。腕も首も肩も腰も痛い。

1人椅子に座っているのも気まずいので立ち上がり、感動の対面の後ろ、眺めている人々に頭を下げた。一番前にいる男女は、未だひどく顔色が悪い。それを見て、おやと思う。どうやら、開放され

たからといって、のんびり茶を飲む空気でもないらしい。

…いやな予感がした。

できたらさくつと。

決して自己紹介など聞かずに帰りたい。

のだが、さて、どうなるか。

後ろにいた制服の中、眼帯をしている男性が、一步前に出る。彼は、感動の再会を見ている、顔色の悪い男性に声をかけた。

「バージル殿下」

声をかけられた男性は頷き、顔を上げた。彼に支えられた女性も、アレイスタを見る。

声が聞こえたらしい抱き合っていた父親が母親をなだめ、この2人も顔を上げた。釣られて、少年も顔を上げる。

全員の視線を感じた。

皆、すぎるような目をしている。

……ものすごく嫌な予感した。

顔色の悪い男性が口を開く。どうやら、彼が代表らしい。

「はじめまして、アレイスタ嬢。

私は、バージル・ライアン・エリス・アルフレッドと言います。

エセルバート卿から話を聞きました。

甥を見つけて連れてきてくださったこと、感謝いたします。

本当にありがとうございます」

途中サー・エセルバートのほうを見て頷き、彼は深く頭を下げた。ゆっくりと顔を上げ、ひたとアレイスタを見据える。

切羽詰った顔をしていた。

彼の名乗りに家名が含まれていなかったことに、アレイスタは気づいた。つまり、王族ということだ。そして、その名前に聞き覚えがある。

アレイスタとて、自国の王子の名前くらい知っている。
バージル皇太子。女王アレクサンドラの第1子だ。

「そして、お願いしたいのです。

私たちの娘を探すのに、協力していただけませんか」

なんてことだ、とアレイスタは思った。

しばらく、ご飯にはありつけそうにない。

013 拾い物は厄介ごとの予感（後書き）

鼻からすべての水分が抜けたら、新しいものに進化できたりしないでしょうか。

そう思ったらがんばれるんですが。

あ、でも虫は勘弁。鼻の皮向けたらばりばりっと、わさわわさわさーって。それはホラーだ。

鼻風邪つらいです。

そういえば、挿絵とかあったほうがいいんでしょうか？ほしい人がいたらつけようかな。でも、イメージと違って結構嫌なものですよね？？完結したらオマケ的につけようかな。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5258x/>

魚人転生者と召喚被害者

2011年12月7日08時45分発行